

桜蔭俳話会 七月句会 (第三三七回)

平成二十七年七月二十六日(日)

会場 旭区民文化センター(サンハート)

- |                    |     |
|--------------------|-----|
| 3点①言葉なく遺影に送る団扇風    | 秀一  |
| 3点①素直すぎる母となりけり沙羅の花 | 友子  |
| 3点①八月やしつかり食べておけと母  | 才美  |
| 2点①炎天の解体済みし生家かな    | 守   |
| 2点①サングラス売場の鏡独りじめ   | ツル子 |
| 2点①定位置のソファの軋み帰省の子  | 守   |
| 2点①味みして母の味なり孟蘭盆会   | ツル子 |
| 2点 片蔭の途切れる毎の影ひとり   | 友子  |
| 2点 手を止めることなく返事杏煮る  | 友子  |
| 2点 金魚玉いつか宇宙へ移住かな   | 明美  |
| 2点 身の内の水を滾らす炎暑かな   | 明美  |
| 1点 組上げしばかりのベンチ夏の蝶  | 秀一  |
| 1点 ドア開く熱風の中さあ行かん   | ヤエ子 |
| 1点 日盛に行く当てもなし己かな   | 眞壽  |
| 1点 初蝉や戦後七十の夏を告ぐ    | 直子  |
| 1点 夏帯の赤のあざやか茶髪の子   | 明美  |
| 1点 手も脚もつつむ庭師や蚊遣香   | 秀一  |
| 1点 偏差値を問はぬ太陽大向日葵   | 才美  |
| 1点 拭きのこる指のインクや遠花火  | 秀一  |
| 1点 古稀過ぎて職捜しする梅雨の星  | 眞壽  |
| 1点 非常線張らるる街の暑さかな   | 明美  |

※

- |                  |     |
|------------------|-----|
| 梅雨明けて兄の尻もち治るかな   | 直子  |
| うな重の松竹梅や梅雨あけし    | ツル子 |
| 誰でもが主役となりぬピアガーデン | 才美  |
| 瑕疵のある法制ひとつジギタリス  | 明美  |
| 多数派の隙間に確と猫じゃらし   | 才美  |
| 横切つて一寸ぶらんこ乗って見る  | ツル子 |
| 大樹に白く大きな茸生       | 直子  |
| 原発の閉店セール冷奴       | 才美  |
| いなびかり去り声交す鴉かな    | 秀一  |
| 炎天や句会来るのも命懸け     | 守   |
| 身を反らし青葉のかたち空に見る  | ヤエ子 |
| 雷が遠く聞こえる山の寺      | 眞壽  |
| 目に沁みる汗大山に雲かかる    | 友子  |

- |                   |     |
|-------------------|-----|
| 七夕に派手な短冊巡り見る      | 眞壽  |
| 老鶯や犬を連れたる背美人      | ヤエ子 |
| 青蜥蜴古代のまままで走り去る    | ツル子 |
| 百足虫遣ふ足の多さに悲鳴のみ    | 直子  |
| 暗闇で風に吹かれて夏の月      | 眞壽  |
| 鉛筆の芯尖らせり夜の秋       | 守   |
| 落ちてなほ姿崩さぬ凌霄花      | ヤエ子 |
| ラベンダー五色に映える美瑛の丘   | 直子  |
| 夢の母の歩いてをりぬ昼寝覚     | 友子  |
| 紅の濃いマンゴー届く昼日中     | ヤエ子 |
| 夏の果て原発事故の矮小化      | 守   |
| (不在投句 古野明美、荒木ツル子) |     |
| (選句後の投句)          |     |
| 九頭竜の中州の雑木時鳥       | 幸   |
| 朝市の日焼の女籠を編む       | 幸   |
| 羅の中に秘めたる小引出し      | 幸   |
| 石垣に偲ぶ乱世や夏木立       | 幸   |

「事務局からお知らせ」

○第一一八回通信句会作品募集

夏に属する季語を用いた三句。締切りは、八月十日(月)厳守。同封の葉書でお送りください。

○八月は句会は休みです。

○九月句会

・日時 九月二十七日(日)午後一時から。  
・場所 旭区民文化センター(サンハート)